

同窓会

ニュース・レター

第10号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2011年3月20日発行



文系総合研究棟(正面奥)と整備された文学部本館横通路



歓談する志水副会長、片山研究科長、栗原准教授

目次

鼎談／女子学生と女性研究者の過去と現在	P 2
平成 22 年度課程博士・修士・卒業論文題目	P 5
研究室今昔	
国語学研究室、日本・東洋美術史研究室	P 9
お知らせ	P10

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

鼎談

女子学生と女性研究者の

過去と現在

文学研究科・文学部は、創立後比較的早い時期から多くの女子学生を迎え、また多くの女性研究者を輩出してきました。

今回は、文学研究科から女性研究者として巣立られた最初の世代に属する志水紀代子同窓会副会長、現役の女性教員として文学研究科に在職の栗原麻子准教授、そして片山剛研究科長に、文学研究科・文学部における女性のかつてと今、そして将来を語っていただきました。

(構成 三谷研爾・岡田裕成)

まず、現在の文学研究科の状況を。

片山 2007年度の大阪大学全体のデータになりますが、各学部の卒業生の男女比をみていきますと、女性の卒業生が多いのが、文学部、人間科学部、そして外国語学部です。特に外国語学部は顕著です。689人の卒業生のうち、女性が525人です。人間科学部の男女比は60:84、文学部は76:112となっています。

文学部の在学生は、1年生では女性が56、57%、2年生も女性が50%より多い。で、3年生、4年生というところ、大体1:1に近いですが、それでも、やっぱり女性の方が若干多いという感じになっています(註 2010年5月現在)。

大学院でも、基本的には同じような傾向が見られ、女性は1年生で60%、2年生で52%です。ただ、52%といえども、マスターの2年生つていうのは、3年目の人とか4年目の人もいますから、そういう人を含めての数字です。大学院の博士後期課程では、若干男性が多いようです。この背景としては、将来の職業として研究者を選ぶ場合に、女性がまだ少しためらわざるをえないような社会状況があるのかもしれません。

——教員については？

片山 大阪外大との統合で、旧外大から12名の先生がいらつしやいましたので、今、助教の方を含めまして、教員が全部で94名おります。空いてるポストもいくつかあるんですけども、その中で、女性で教授の方が4名、准教授・講師で7名、助教が6名です。助教は比率としては女性の方が最も多いカテゴリーです。

——志水先生が哲学の研究室に進まれた頃、文学部の教授・助教に女性はいらつしやなかったのですか。

志水 ええ、いらつしやなかったですね。で、哲学、昔は講座制でしたから、哲学哲学史第二講座つていうのはドイツ哲学、第がフランス哲学。

片山 ええ、うちはそうですね。第一講座がフランス哲学で、第二講座がドイツ哲学で、珍しい。**志水** それでイギリス、英米というのとは倫理学の講座でした。私は第二講座の方で、もう一人いらした方とともに、初めての女子学生でした。

片山 女性の第一期生。

志水 第二講座ではそうですね。ただ第一講座にはすでに先輩がおられました。私は1960年入学の安保世代なんです。

余談になりますが、去年入学50周年の同窓会がありました。私たちの時は定員が60名で、

女子学生が確か26名だったと記憶しています。60名がクラスで、英語なんかは一緒に受講するんです。

そうすると、そこに先輩たちがオルグに来るんですよ。あの頃はまだ、戦後15年目ですから、反戦意識が高く、クラス決議をやつて、斉にデモ行進に出発するんです。バスをチャーターして、御堂筋デモや榎公園での集会に参加したりとか、本当によく活動していましたね。

1960年の時点で、60人の定員に対し、26人が女性だったとのこと。つまり、半分近くがもう既に女性だったということですね。

年によつてばらつきはありますが、文学部の男女比はその後も、概ね1:1か、少し女性が多いというところで推移しています。

志水 変わつてないんですね。去年のその同窓会の時に、だれかが、私たちの次の年に男女比が逆転したと言つておられように思います。

栗原 女性が大学に行こうと思つたときに、やはり文学部がなじみやすかつたといったこともあるんでしょうか。たとえば、卒業後、就職への道が開かれていたとか。

志水 そうですね、やはり、文学部ということでも女性が多かつたです。私たちの頃、工学部に入つた女性はいなかつたように思います。

栗原 いやあ、私の頃でも工学部の女子は少数派でした。今はもうちやうと違つてきているのは。

片山 今はもう理科系の女子学生がものすごく増えてますね。まず、文科系の中でも文学部、外国語学部以外の、法・経にまず女性が増えつて、その次に理科系に女性が増えていく。

共通教育で、どの学部でもとれるようなクラスの授業を担当しますと、理科系でも女性が多めに多いというのが、よく分かります。法・経の場合でも、就職の段階で企業が女性の総合職を採るようになってくると、女性の入学者が増える。

理科系の学部でも、女性を企業が採用する



ようになってくると、やっぱり、もちろん理科系に興味のある女子学生はいますから、入学者が増えていくんじゃないかなと思います。

——志水先生が入学された頃、同級生の皆さん、特に女性の方は、どんな夢を描いておられたのでしょうか。もしかすると、女の子だから文学部に行きなさいとご家庭などと言っていたのでしょうか。

志水 それはあつたと思います。私の高校の先輩ですけど、阪大の文学部と、ある有名な女子大学に合格されて、その女子大学の方にいかれたということも聞きました。

またこんなこともありました。地方から来ている女性で、デモに参加することを禁じられたと。でも、阪大の学生たちが盛んにデモに出

るといふのを親御さんが聞かれて、大学を辞めさせられたんです。その半年後、それこそ、家を出して大学に戻りました。私など信じられなかったんですけれども、やはり、地方から来ておられたこともあって、親御さんは多分本気で心配されたんだと思います。

片山 地方から大阪に送り出した親が子供に期待すること、また違うところがあったのかも知れないですね。

志水 そうですね、私など極端かもしれませんが、父親がそもそも大学に行くことに絶対反対でした。高校に行かせて貰っただけでも有り難く思えと言われて、大喧嘩した世代ですから。

——専門に進まれたとき、哲学に行かれた女性には、志水先生ともうお方のお二人だったのですね。

志水 当時の哲学科は、それこそ学生が来ない学科だったんです。それが、安保体験ということもあって、一挙に学生が押しかけたんですよ。それも私を含め留年組など色々でした。

先生には女を忘れて哲学をしないと言われました。「男も女もない、女を忘れて」という風に。また別の先生には、「自分が教養で教えていたら、哲学になんて来させなかった、女に哲学は向かない」とか。

栗原 まあ、そうですね。

志水 いまだつたらほんとセクハラですけども(笑)。

——では女性の方は、たとえば日本文学とか英文学とかそういうところが多かったんですか。

志水 多かったですね。やはり、英文が多かったですし、心理学も。それから、国文学。西洋史に行かれた人もおりました。理系では理学部に行った人が多かったですね。

志水先生は、大学院時代に結婚されて、お子様もお生まれになった。そのころ設立に関わられた、大学の共同保育所のことをお聞かせください。

志水 当時教養部の教員だった小森田さんたちを中心に、教職員のみなさんと、保育所作りの運動をして、1968年5月に待兼山町111に、プレハブの「のぞみ保育所」を開所しました。

建物を建てるころまではいったんですが、保母さんの定員化はして貰えなかったから大変で、保母さんのボーナスの時期はお金がないものですから、学内でバザーをやったりして運営したんです。私が大学院生の頃ですが、運営委員長もしました。

栗原 共同保育所？

志水 共同保育所です。大学院の修士のころ、ストで校舎が封鎖されていて、子どもを預けて大学に来て、保育所の運営のことはよくやりつて、そんな時期もありましたよ。

片山 豊中キャンパスにはしばらく保育所がなかったんですけれども、早ければ来年の四月に開設の予定です。でも昔は大変だったでしょう。

志水 そうなんです。ただその後、高度経済成長期の中で、地域の保育所がどんどん作られて。そうなりますと、共同保育所は保育料が高いし、手がかるので、地域の保育所に入れることができる方は皆さんそちらに移りました。確か1992年に設立から24年で閉園したんです。

栗原 そういうものが多分今につながっているのだと思います。今、保育所、増えてますけど、大学院生は常勤職でないということですね。

なかなか預けにくいということがあります。大学の中にバックアップ体制があるというのはとても大事なことです。

——お話をうかがっていると、色々なことに隔世の感があります。文学部の女子学生の意識や気質に変化があったとすると、いづころでしょうか。

志水 68年頃、ちょうど団塊の世代の方たちの入学に当たりますか、女性もかなり大学院に入つてこれ、活発に発言もするようになって。あの頃から段々意識が変わってきたんじゃないでしょうか。阪大でも文学部で有名な、Gパン論争というのがあつて。

栗原 ありましたね。一昨年ぐらいの待兼山論争に、そのことを取り上げた論文が掲載されました。

片山 これですね(待兼山論争を示す)。2007年の日本学篇41号です。

1977年5月11日授業開始時間に、5分遅れて教室に入った文学部3年の女子学生に対し、担当教師のフィリップ・カール・ペーダ講師が退室を命じた事件にこの論争は始まる、と。ペーダ先生は神戸女学院大学の先生で、非常勤に来てくださっていました。

志水 そうです。ペーダ先生。思い出しました。**片山** Gパンを履いてきた女子学生に退室を命じたという話ですね。今はもう、先生ですらGパン履いてますから。

——ここで今度は、栗原先生に、女子学生・女性研究者の「今」についてお話しただこうと思います。

栗原 志水先生が大変苦勞なさったということは、ほんとに身につまされる話です。

今の女子学生にとって、大学に来ることは全く普通のことですよ。女性であるということ意識することは、あんまりないよう思うんです。彼女たちが、どこで最初に女性であるというこの壁に突き当たったのか、ちょっと見えない。でも、就職活動中の女子学生が、男の子はすぐ決まる、ということ言ったりしているのを見ると、やっぱりまだ不遇であるという意識はあるんじゃないかな、というのがありまして。

志水 そうなんです。

栗原 大学院生も、今は就職がとても難しくなってます。助教の任期も3年になりましたし、書かなければいけない論文数も比べものにならない。

——そういうときに、男性でも多分苦しいんだと思うんですね。浮世のことは全て捨ててみたところがないといけないんでしょ。女性はその子孫を産むということを考えると、生物学的に時間が限られていますので、余計に厳しい状況になっているんじゃないかと思えます。

女性が出産して、就職もして、全部手に入れた、というキャリアはなかなか望めない状況なんじゃないかな、という感じがあります。

志水 厳しいですね。

栗原 結婚と研究の両立は相手次第でなんともなるんですけども、「さらに」出産も、となつたときに、志水先生のバイタリティーはどこから出てきたんだろうと思います。

志水 さて、どこからでしょうか(笑)。

プロフィール



片山 剛(かたやま 剛)
1952年生まれ。1981年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。
1981～1989年、高知大学文学部に勤務。1989年より大阪大学文学部に勤務し、1998年より同大学院文学研究科教授。2010年4月より研究科長。



志水 紀代子(しみずきよこ)
1940年生まれ。1965年、大阪大学文学部卒業。1971年、大阪大学大学院文学研究科博士課程満期退学。1971～1974年、大阪大学文学部助手(哲学)。1974年より追手門学院大学に勤務し、1989年より同大学教授。大阪大学文学部・文学研究科同窓会副会長。



栗原 麻子(くりはら あさこ)
1968年生まれ。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。奈良大学勤務を経て、2004年より大阪大学大学院文学研究科准教授。



栗原 私は専門の関係で、志水先生と同じぐらいか、もう少しご年長の女の先生方とお会いすることがありますが、開拓期の大変な時期なのに仕事も、子供という方が多いんです。

けれども、若い研究者は、そこらへん現実見たりというのか、あきらめられている方があります。今はもっと厳しくなっていますから、これからどうなっていくのか、心配なところですよ。

もちろんいろんな人生があつて良いと思います。独身の人生もあれば、仕事に邁進して子育ては邪魔というそういう人生もあつて良いと思うんですけど、選択肢が非常に狭まっているんじゃないかなという感じがあります。女性だけではないですけど、研究者を目指すことがとても難しいことになっているのかな、という感じはします。

かつては、女性の研究者は頑張らざるを得なかったし、また頑張つて当たり前という雰囲気もあったかもしれません。それに対して、今の若い世代の女性たちには、そうしたある種の気負いがありみられなくなったようにも思います。

栗原 頑張らなければいけない、女性だからということで頑張つてらしたのは、私よりちょっと上くらいまでなんです。それがもう、女性だからという風に、指導教員にも思われなくなってきた。

私たちの世代は、就職などでも、女性であることを全く意識しなかったのかもしれない。

片山 女性の研究者として見られているので、後輩の人たちのことも考えると、自分が頑張んなきゃいけないみたいなところはありましたね。私の同級生とか、少し先輩なんだと、そういう意識はわりとありましたね。

栗原 一般社会の方でも男女雇用機会均等法が当たり前になつてきました。私の同級生なんかですと、当たり前になにも考えないでとりあえず総合職で就職しまして、後で困つてしまつたという方もいます。大学も、当然女性の院生もいても良いし、という環境になっています。そのことが、以前とは違いますね。

志水 そうですね、確かに私たちの親の世代の考え方ですね、大学を出るといことまでは親も認められるけどそれ以上に進学するということとはやはり、結婚の問題もあつて許さなかつた。そういう価値観をまだまだ共有していたんじゃないですか。

だから大学院に行つて、後どうするのかというところでは、私たちの時代はほんとに先が見えませんでした。私も、先生から就職は諦めろとさんざん言われました。

栗原 それは女性だからということですか。それとも哲学だからという？

志水 両方ですね。そうしたジェンダーバイアスがまだまだありますね。いまはそれが見え難くなつてきているだけに、いつそう始末が悪いとい

う、そういう状況ですね。

近年、かつての女性たちが経験してきたような困難は、社会的な制度としてはそれなりに解消されてきたのかもしれない。しかし他方で、いくぶん古風な規範意識も依然として残つていて、その両者が共存しているようにも見えます。

志水 棲み分けているようなところがありますよね。女性も頑張っているんだけど、まだまだ厳しい現実があるのを見ていて、しんどいなあ、と。結構、専業主婦に対するあこがれもあるみたいです。

栗原 そういう志向が強まっていると報道なんかではいいですけど、どうなんですか。

志水 共働き家庭の子どものが、専業主婦にな

りたがたり、そうさせるというのですが、それはあるかもしれませんね。

片山 そこで感じるのは、日本の社会が、女性

がほんとうに安心して働けるような条件を、まだまだ整備できていないということです。

とはいえ、特に文学部のような場では、これからも女性研究者の活躍の場は広がっていくと思われま

す。その若い世代が研究者として成長していく過程で、誰がアドバイザーができるのかとなつたときに、女性のスタッフが研究科の中におられるというこ

とは、いろんな意味で重要ではないでしょうか。

栗原 たしかに。身近なところに女性研究者の姿があるだけでも効果はあると思います。じつさい今日の志水先生のお話をうかがっていると、ああそうなのかなと思うところが沢山ありました。

道を切り開かれた志水先生までの時期と今とで、そんなに変わらないかもしれないという気がします。

片山 私のところの専門分野で、去年と3年前かな、集中講義の先生として、女性の先生をお呼びしたんです。お二人とも、ばりばりやっている方だったので、うちの女性の院生たちを元気づけるというのも、一つの目的だったんです。

うちお二人は、わりとあねご肌の人を呼んだんですけど、そうしたら男子学生はもう、すごい先生だなと思つてましたし、女子学生の方は、こういう風になれたらいいなみたいな、憧れの像というんですかね、一つの目標ができたようでした。

栗原 大学院生さんたちつて、これはオフレコですけれども、うちの学生なんか見えますと、女子学生の方が遙かに元気が良いですよ。

片山 どこでもそうじゃないですか。

栗原 言うとはんかと思つて(笑)。

片山 留学なんかも、どちらかというと女性の方が積極的でしょう。男性の方はなんか色々考えちゃうようなところもありますね。

——女性が元気なのはやはり事実ですから、文学部・文学研究科でも、大いに頑張つてもらわないといけないように思います。

片山 男子学生のお尻を蹴飛ばしている女子学生が多いような感じはしますね(笑)。



現在、国語学専門分野は文学研究科文化表現論専攻、東洋文学・国文学講座に属している。学部では、日本文学・国語学専修課程の一員として学生を指導している。

旧日本文学講座から国語学講座が分かれたのは一九六四（昭和三九）年のことで、初代教授は池上楨造先生であつた（一九七四年ご退職）。その後、宮地裕先生（一九六七年ご着任、一九八七年ご退職）、山口亮二先生（一九九四年、学内組織改編により編入、一九九六年ご退職）、前田富祺先生（一九七七年ご着任、二〇〇二年ご退職）、蜂矢真郷先生（一九九二年ご着任、二〇一〇年ご退職）、金水敏（一九九七年着任、二〇〇一年に教授）、岡島昭浩氏（二〇〇三年着任、二〇一〇年に教授）と続き、現在は金水と岡島氏の二人教授体制となっている。

国語学専門分野の教員・学生・卒業生は、出発時から日本文学とともに大阪大学国語国文学会会員として活動をし、学会誌『語文』の刊行に携わつてい



2002年5月、日本文学と合同チームでソフトボール大会出場

る。また平素は日本文学、比較文学と活動をとにもすることが多く、春の遠足、院生研究発表会、夏のパス旅行、卒論・修論中間発表会等の行事を共同開催している。海外からの留学生が途切れなく在籍しているのも特徴と言える。近年は国語学独自の行事として、新入生歓迎会、夏の研究発表合宿が恒例となった。

国語学専門分野は、歴史的研究を主に担当するという伝統があり、歴代の教授のご専門にも、語彙史、文字・表記史、文法史の三本柱が見て取れる。この点は現在も変わらないが、近年では研究の幅も広がってきた。教員・学生の活動は理論研究、外国語との対照研究、ポピュラーカルチャー、方言フィールドワーク等にも及んで、研究室では自由に活発な議論が日々交わされている。

（金水 敏）



2006年9月、研究発表合宿

研究室今昔

文学部に美学科が創設されたのが一九七三年、今の日本・東洋美術史研究室の前身である美術史第一講座が設立されたのはその翌年であった。武田恒夫先生、肥塚隆先生の二人体制でスタートした講座は、武田先生の退官後に奥平俊六先生が着任され、一九九四年には教養部から原田平作先生が転任されて新たに三人体制となった。

その後、原田先生が退官されて藤岡が着任。二〇〇二年、総合学術博物館の開設にともない肥塚先生が同館に転任、再び二人体制となった。肥塚先生の退職後、博物館には泉万里先生、次いで橋爪節也先生が着任され、いずれも兼務ながら日本・東洋美術史研究室をしっかりと支えていたのだ



島根への研究室旅行にて

これまで、総合学術博物館はもとより、各地の美術館・博物館とも連携をはかり、文化財行政や地方史編纂事業にも積極的に参加してきた。これらを通じて、学生たちも社会との繋がりを感ぜながら生き生きと美術史の研究に取り組んでいる。今後とも学内外の皆さまの力を添えを得て、研究室の発展に努めていきたい。

日本・東洋美術史研究室の特色は、日本近世絵画史、仏教美術史の二つを核にしている点である。日本とアジアの美術史を二人でカバーする場合、この二つを核に据えるのがもっともバランスのとれた布陣である。弱いところは中国絵画と工芸、

（藤岡 穰）



昨年、文学部1年在学の森田洋理君が、学業半ばにして亡くなりました。本同窓会の一員でもあるご祖母様からのご投稿をここに掲載し、洋理君の冥福をお祈りしたいと存じます。

昭和37年卒業の森田小夜子でございます。孫洋理が今春文学部に入學いたしました。理系人間が優勢な我が家にあつて、嬉しいことでした。夫、娘、息子と大学人ばかりの中で、恐らく洋理も永く大学にいて勉強を続けたいと願つたと存じます。

11月、短い人生を終える事になりました。苦しい抗癌剤治療に耐え、手に入れた二年余の時間。その間に大学入試もありました。言語学にも興味を持っていた洋理は、多様な言語についても学べる大阪大学を選びました。本で知っていた先生方の授業を受け、直接お話をうかがい、本で知った世界がより発展していく時間を楽しんでいました。また、学部を超えて学べる授業があり、色んな立場の人の意見がきけて知りたい事がますます増える、阪大の学生生活は楽しすぎる、と嬉しい期待を話しておりました。求めていたものをおぼろげながら手に入れるすべを知り、まさにじっくり向かい合おうとした矢先に、その時が来てしまいました。さぞ無念だつた事でしょう。治療の合間をぬつて母親が運転する車で通学致します姿を「ゆっくり過ぎしたら良いのに」と息詰まる思いで眺めました。帰宅後もノートの整理、レポート、そして読みたい本、と充実した時間を過ごしているようでした。夏休みに入つて、急速に病状が進みました。

18年余の短いけれども凝縮した、精一杯生きた時間でした。私の後輩になつた事を誇りに思つていた洋理が生きて、阪大文学部の学生だつたと言う事をどこかに書き留めていただきたかと思ひました。

11月10日、私共に思い出をいっぱい残して旅立ちました。

同窓会幹事の皆さまのご厚意により、このような紙面をいただきましたことに御礼申し上げます。

東北地方太平洋沖地震による 災害についてのお見舞い

このたびの

東北地方太平洋沖地震により被災された皆さまに、
心からお見舞い申し上げます。

大阪大学文学研究科長・文学部長

片山 剛

大阪大学文学部・文学研究科同窓会会長

河上 誓作

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

同封の
「教育ゆめ基金」
案内を
ご覧ください

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成22年度は同窓生ならびに教職員の皆様より、総計100万円超のご寄付をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年度「教育ゆめ基金」寄付者リスト

浅野十糸子	大村 睦子	神山 孝夫	戸崎 昭一	東丸賢太郎	山戸 照靖
栗根 功雄	小笠原幹雄	金 水 敏	鳥居 久員	平戸 喜文	山根 雄介
井上 淳子	岡田 禎之	小林 正人	中川 一	藤田 隆則	吉川 恵子
上村 元子	緒方 美咲	三高 実里	永 田 靖	細川富美恵	吉田 高重
内 村 勝	女 屋 登	志水紀代子	中野 智美	三木 善彦	渡辺 義嗣
江 川 温	柏木 隆雄	高 橋 章	長山 泰孝	森岡 裕一	
大西富美子	片 山 剛	武田 恒夫	成田かおる	森本 泰子	
大庭 幸男	上久保啓子	田村 妙子	服 部 敬	矢羽野隆男	(敬称略五十音順)

◆「教育ゆめ基金」の支出(平成22年度)



- ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム留学生の宿舍費補助：90,000円
 - ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム留学生の授業料補助：144,000円
 - ・エラスムス・ムンドゥス・プログラム留学生のための情報環境整備：約60,000円
- (平成23年3月3日現在の残額：2,901,486円)

※エラスムス・ムンドゥス・プログラムとは、国際的な教育をおこなうためにEUで作られた制度で、大阪大学文学研究科は2008年から「域外パートナー」としてこれに参加し、学生の交換留学や教員の研究交流をすすめています。

大阪大学未来基金

大阪大学未来基金は、教育研究環境の充実に向けて支援します。
阪大生が充実した学生生活を送れるように、ご協力をお願いいたします。



皆さまのご厚意は、奨学金や、1冊の図書、海外留学の援助など、一人ひとりの学生の教育研究環境の充実に活用されるほか、基金として運用され、未来の「阪大生」の人材育成に活かされていきます。是非とも皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

【基金の活用事例】

教 育

研 究

国際交流

社会貢献

【大阪大学基金事務局】〒565-0871 大阪市吹田市山田丘 1-1
TEL : 06-6879-8327 FAX : 06-6879-4337 E-mail : kikin@office.osaka-u.ac.jp <http://www.miraikikin.osaka-u.ac.jp/>

事務局便り

お知らせ

◆文学部創立五十周年記念写真集『大阪大学文学部50年の歩み』、『文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』(二〇〇七年版)販売中

一九九八年に大阪大学文学部創立五十周年を記念し製作された『大阪大学文学部50年の歩み』の残部(二百冊程度)を卒業生・修了生の皆様に限り、販売(二〇〇〇円)+送料(二六〇円)で販売いたします。

また、二〇〇七年六月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』のご購入も随時承っております。こちらは販売(四〇〇〇円)+送料(二六〇円)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承ください。なお、同窓会終身会費(二〇〇〇〇円)をお支払いいただいた方には一冊謹呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。

名簿につきましては、二〇二二年に次版の発行を予定しております。本年より連絡先調査等を開始いたしますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

写真集、名簿のご購入を希望される方は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくご連絡下さい。



【写真集、名簿、終身会費のお支払い】

口座番号 00940・1・79043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修専門分野名をご記入下さい。

お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の不記載を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局メンバー

事務局 長	和田 章男 (S五五)
総 務	入江 幸男 (S五二)
会 計	岡田 禎之 (S六二)
企 画	西田有利子 (S五六)
	村田 路人 (S五二)
広 報	市 大樹 (H七)
	三谷 研爾 (S五九)
事務局補佐	岡田 裕成 (S六二)
	宮川 真弥 (H二二)
事務局補佐	松岡 佳世 (H二二)
(HP担当)	

●住所 〒560-0852 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

●事務局メールアドレス: dousoukai@let.osaka-u.ac.jp